

大学の「学校化」問題と『平和論』

名古屋市長立大学大学院人間文化研究科 平田 雅己

「明日も生きていたいと思える状況」

今年の後期教養科目『平和論』の初回で、ある一年生が記した平和の定義である。今年で八シーズン目となる本科目だが、これほど切実な定義はこれまで見たことがない。自分が置かれていた社会状況を客観的に見つめた言葉なのか、あるいは自分の心境を素直に綴った言葉なのかはよくわからない。いずれにせよ、現代を生きる若者の生活実感から湧き出た表現として、私の心にずしりと重く響いたことは確かだ。

本年度の開講前、私はメディア報道を通じてある二つの数字に触れていた。この国で生きる未成年者の自殺者が二〇一八年度、史上最悪の五九九人に達し、原因の最多が学校問題であるという。この場合の学校とは中学校と高校である。さらに上記二つの学校に小学校も含めた学校現場において、不登校を選ぶ若者が日本全国で少

なくとも四四万人もいるという。この「五九九」と「四四万」という数字を念頭におくと、冒頭の言葉を残した新入生は自殺を選ぶことはなかったが、絶えず不登校と背中合わせの過酷な学校環境を何とか生き抜いてヘトヘトになって本学に辿り着いた若者に見えてしまうのは気のせいだろうか。

ここ数年、すぐそばで話をしているも聞き取れないほど細かい声の学生がにわかが増えてきた実感がある。本人は懸命に声を出しているようだが、声の張りもないせいかとにかく聞こえにくい。海に向こうにも驚くほどの小声で活躍する十八歳のアーティストがいる。本年度のグラミー賞にて、主要四部門を史上最年少で制覇したビリー・アイリッシュだ。洋楽好きの私がかれまで耳にしたことがないほどの超ウイスパ。ただし例えば彼女の代表曲Bad GuyのPVを見てもらえばわかるが、歌いっぷりは実に淫瀾としている。

翻って私の目の前にいる彼女と同世代で同じように声の小さい日本人の若者からは、この淫刺さが感じられない。こうした若者を産むもっぱらの原因が、彼らがこれまで過ごしてきた学校にあるのだとしたら、誠にいたたまれない気持ちになる。ちなみにビリーはホーム・スクール育ちである。

学校とは何か。この問いは私にとって古くて新しいものである。小学校から中学校まで私は極々平凡で、どちらかといえば能天気な学校生活を送っていた。しかし高校、特に本学学生の多くと同様、いわゆる「進学校」という名の学校を選んでしまったことで、私は人生初の闇を経験することになった。今から振り返るとちっぽけではあるが、当時抱えた最大の悩みは友人ができないことだった。それまで何の苦勞もなく、自然にたくさん友人ができたのになぜかできない。両親や教師に相談してもなしのつぶて。無理やり部活にも

所属したが、部員同士でいがみ合うことが多く、気の合う仲間をなかなか見つけられない。私が高校に入学した時、マークシートの大学共通一次試験導入から数年が経過していた。以前は存在しなかった成績順位表が毎試験ごとに校内で張り出されるようになった。順位はなかなか上がらず、学びの意欲が減退した。嫌だろうが何だろうが、学校はいかなければならない場所と思い込んでいた。自殺を選ぶことなく三年間何とか生き抜くことができたのは、ひとえに厳しい校則がなかったこと、そして何より私の閉ざされた心の扉を開き、無限の世界が自分の内側にあることを教えてくれた音楽との出会いがあったからだろう。数年前、卒業後初となる高校の同窓会通知が届いたが、私はその招待をあっさり断ってしまった。何十年たってもなお、私の内面に残っていた母校に対する嫌悪感に私自身が驚くと同時に、その源は一体何なのかを素朴に知りたいと思うようになり、学校関係の書籍を手取るようになった。

最も腑におちたのはイヴァン・イリツチの『脱学校の社会』（東京創元社刊）だった。そこには私がかうつぶすと気づいていた学校の

本質が見事に言語化されていた。イリツチは制度化された価値観の押しつけや教師が体現する権威に服従する人間を育てる近代の産物としての学校の実相を明らかにし、「脱学校」の視点からあるべき学び機会の可能性を示した。学校という環境の中で「子供たちは一緒にされた同年齢者の中から友だちを選ぶべきだ」という観念を教え込まれる」（二六八頁）。イリツチの

この一文を目にした瞬間、私の心の奥底で溜まっていた滓がすべて取り除かれたような気がした。

大学人としての自分の立場に照らして、目から鱗だったのは次のくだりである。かつての大学は「共同社会であった。現代の大学は人々に出会いの場―その出会いは自治的で上からの統制をはばむものであり、焦点はあっているが活発で計画には縛られていないというものであった―を提供するチャンスを放棄し、その代わりにいわゆる研究と教授を生み出す過程を管理することを選んだのである」（七五―七六頁）

大学は「共同社会」であり「出会いの場」。なんとパワフルで魅力的な言葉だろう。以前、本誌上で私は『平和論』が今後目指すべき方向性として、「この地域に居

住する大学生、大学人、市民が対等の立場で平和について語り合い学びながら、柔らかくつながる関係性を疑似体験する空間」、つまり「授業のコミュニケーション」というビジョンを示した。その後私が出会った先述のイリツチの見解に即しているならば、もともと大学全体がそういう性格の組織として存在していた、ということになる。

前述のイリツチの原著が刊行されたのは一九七〇年。大学の劣化という点でイリツチと問題意識を潜在的に共有した当時の日本の若者たちは「大学解体」を叫んで大学校舎を占拠した。イリツチの問題提起から今年でちょうど五十年。残念ながら日本の大学の実情はさ

らに悪化の一途にある。イリツチの概念を援用して表現するならば、さしずめ大学の「学校化」問題が顕在化しているということであろう。特に文科省による露骨な新自由主義的「大学改革」指導に盲従する本学を含む日本の国公立大学の現状は、イリツチが描いた理想の大学像を真っ向から否定するものである。中央集権による縦の管理体制強化と表層的な数値に基づく永久改革路線が所属教員に過重な行政負担を強いることになり、

結果的にそのことが教員の自由な教育・研究・社会活動を阻害する深刻な構造要因となっている。この問題は『平和論』の理念に直結するものでもある。『平和論』は本学が支持する国連の持続可能な開発目標十七のターゲットのうち、特に十六（平和と公正をすべての人に）を重視している。その中には「あらゆるレベルにおいて、有効で説明責任のある透明性の高い公共機関を発展させる」、「あらゆるレベルにおいて、対应的、包摂的、参加型及び代表的な意思決定を確保する」という小目標が含まれている。残念ながら本学の組織としての現状はこの要件をほとんど満たしていない。

「現状を変えることを面倒くさいと考える人が私を含めてほとんどだと思えます。こうして自分の心の中を正直にかくとともつらくなります。一部の人が（米軍基地や原発の存在によって）苦しんでいることを分かっているながら何もできていない自分に気づき、さらにそれを正当化しようとする自分に気づくからです。この授業を通じてそういう自分に気づけたことがとてもよかったです」

「授業で様々な人々の思いを目の前で見ることができ、まず感じたことは自分の考えを貫き通す人の意志はとても強いということである。何十年も同じ活動を行っている人や批判されることを覚悟で過激な表現で訴える人がいて、そんな人々の講義に圧倒され続けたが同時に美しさも感じた。現実には抗い続けるパワーはそれを目の当たりにした人を魅了することがある」

「平和の実現は一人の力では不可能だ。だが今を生きる人々は内にこもりがちで、他人とのつながりが薄い。壁をつくることをやめて他人と関わることを様々なリスクを持つことは分かる。自分から壁を越えて相手に寄り添おうとしても拒絶されたり、傷つけられたりするかもしれない。それは確かに怖い。けれども怖いからといってそれをやめてしまったら平和は実現しないし、この社会を持続させることも困難になってしまうだろう」

これらはこの地域で平和活動を地道に続けてきた九名のピースメーカーたちによる魂の語りに触れた今年度の『平和論』受講生が

遺した感想文の一部である。この授業の大きな目標は受講生を平和の学びから平和の実践に導くことであるが、その前段階として彼らがこれまで経験してきた学校体験、つまり成績や評価を基調とする恐怖心による学びのシステムからまず彼らを解放させ、そこから自尊心の向上を促すこと、つまり受講生一人一人の目線に立ったエンパワメントの重要性を今年度再確認した次第である。

今年初登壇したセイブ・イラクチルドレン名古屋代表で弁護士の小野万里子さんが、絶望的な状況にあっても、希望を持ちながら自分ができることをする大切さを受講生に説いた。大学の「学校化」傾向は、すでにいろいろなものを過剰に背負わされてきた彼らの背中にさらに重いものを背負わせることを意味する。学校によって抑圧されるリアルな感覚を共有する大学教員と声の小さな大学生たちが、大学環境における平和創造努力で連帯を形成する。この二年間、中間管理職を経験することで、本学の現状体質に直に触れ精神的に追い詰められた私の微かな「希望」はそこにあるのかもしれない。